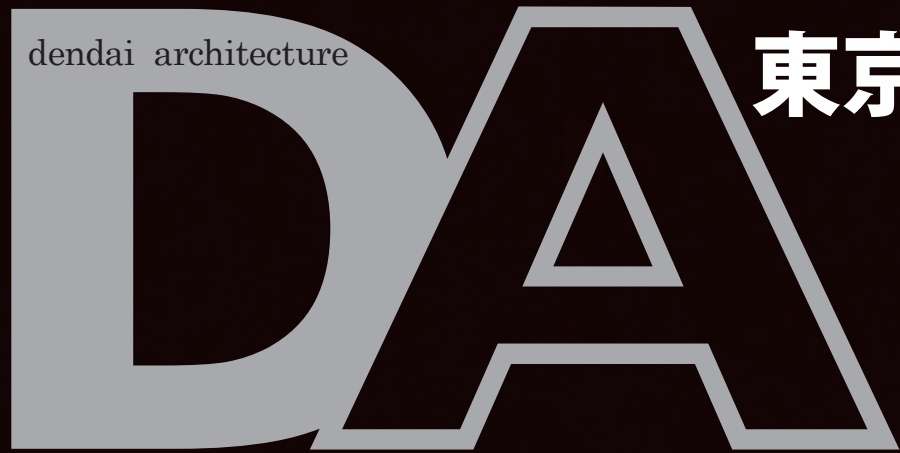
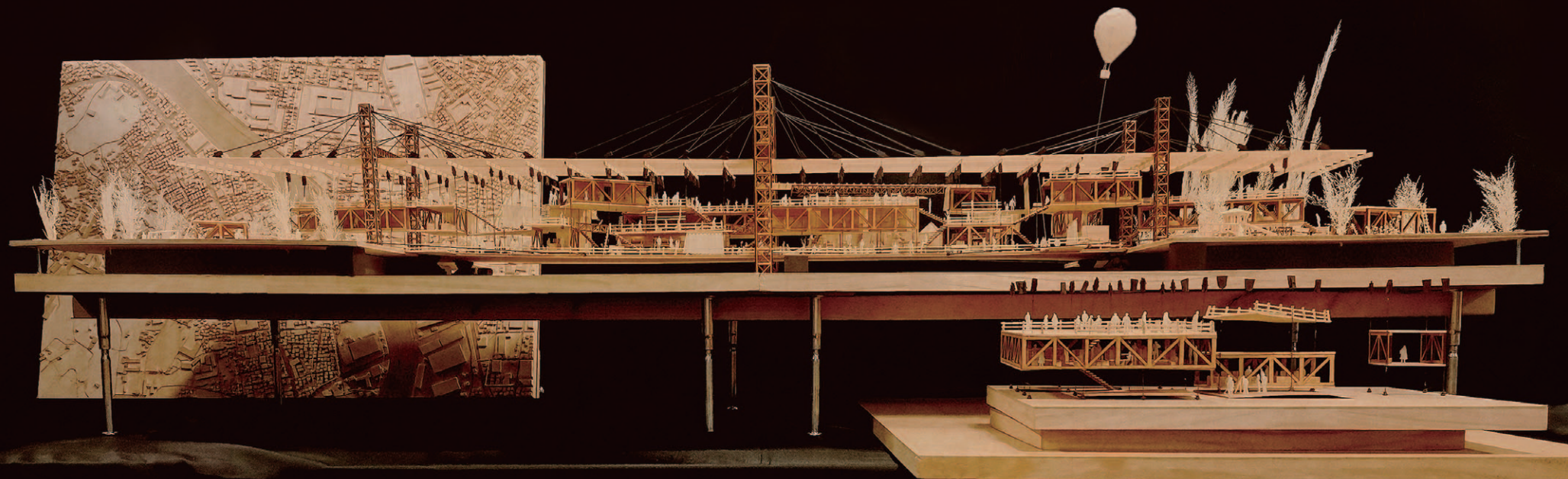


dendai architecture



# 東京電機大学建築学科作品集

2021-2022



# Contents

<i>Diploma</i>	卒業設計	● 空間デザイン系卒業設計 4    ● 工学デザイン構造系卒業設計 11
<i>Core Design Studio I</i>	建築設計製図Ⅰ	● 小さな空間の設計 13
<i>Workshop</i>	ワークショップ	14
<i>Core Design Studio II</i>	建築設計製図Ⅱ	● 住まいの設計 16
<i>Core Design Studio III</i>	建築設計製図Ⅲ	● 公共に開かれた建築の設計 18
<i>Core Design Studio IV</i>	建築設計製図Ⅳ	● 集合住宅の設計・改修 20
<i>Core Design Studio V</i>	建築設計製図Ⅴ	● 未来の小学校の設計 22
<i>Urban Design</i>	建築・都市設計	● 建築からまちづくりへの展開 26
<i>Master's Design Project</i>	修士設計	30
<i>Competition</i>	コンペティション受賞作品	32

## 巻頭言

**土田寛** 東京電機大学未来科学部建築学科 学科長

このDAは、2021年度(2021年4月から2022年3月)に東京電機大学未来科学部建築学科の基幹科目である建築設計製図Ⅰ～Ⅴと3年後期の建築・都市設計、住環境・インテリア設計、建築構造設計、建築設備設計に特別設計ⅠおよびⅡ(卒業設計)の優秀な作品を取りまとめています。学部に加えて、本学では建築学の就学に対して学部と大学院を通じた6年一貫プログラムを実施していることから、大学院の修士設計(修士論文相当)の優秀な作品も収録しています。本学建築学科と大学院建築学専攻の設計教育の内容と成果をご理解いただければ幸いです。

2021年度は、新型コロナウイルスの動静に振り回されましたが、学生らの学びの機会と時間をなるべく損なわないようにとの思いを踏襲しつつ1年が過ぎました。長引く社会不安の中で建築・都市の分野では人やものの動き、なにより人間同士の交流、コミュニケーションを著しく制限される中で様々な変化を受け止め、その先の未来を思考する一年であったように思います。あらためて、社会科学の脆弱性と必要性が再確認された一年であったことは間違いありません。今年の成果も、一部にインターネットを介した遠隔でのエスキスや講評など、先進的な技術を活用しながら、本来のリアルな人間同士のやり取りに戻して行いました。改めて、建築学の中心には常に生きた人間がいること、その生活に建築が不可欠であることを再認識することもできました。豊かな社会とは何か、創造性ある技術の獲得とはなにか、といった普遍的なテーマ、”技術は人なり“という研究・教育のスローガンの意味を再確認しました。

本学建築学科では、多様化、細分化する先端的な専門分野の方向性を受け入れつつ、一方で建築学の本質として個別分野が統合的に“建築”を形づくるとともに、建築を含む構成要素が都市社会を構築し、未来の文化を育むと考える、“総合工学としての建築”をテーマに、異なる専門分野の教員と学生が日常的に交流し、見え、感じることのできる研究・教育環境を整えています。

最後に、建築学科の設計教育にご尽力いただきました多くの非常勤講師の先生方に深くお礼を申し上げますとともに、今後ともなお一層のご指導、ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。

2022年7月吉日

## 講評 ● 日野雅司

建築学科で学生たちは幅広い専門知識を学び、建築デザインが扱っているテーマやその意義を知ることになる。建築が社会に対して何を成すべきか、何を問うことができるのか、大学4年生の社会への視座を測る上で卒業設計は大切なマイルストーンである。そのため卒業設計は表現の巧みさやプランニングの精度だけにとどまることなく、ひとり一人の社会に対する感性が試される場面であり、テーマの幅広さが建築学科の教育の成果として評価されるべきものである。

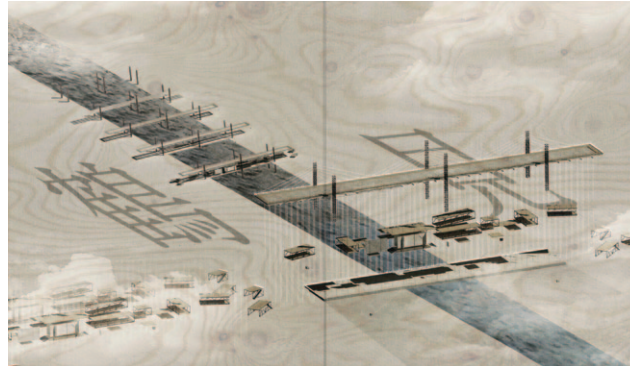
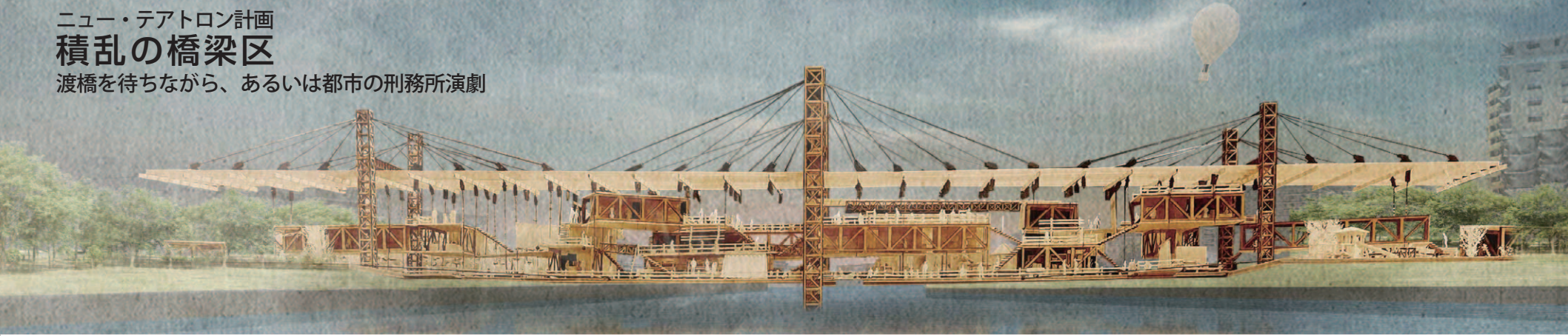
選抜作はどれも社会に対する視座が明確であり、建築をデザインするという行為で社会を変えていくという気概を感じるものである。「積乱の橋梁区」は「表現する」という人の原初的行為を、都市のシンボリックな視点である橋に劇場という形で提案している。建築をつくる「場」と「機能」の再発見した意義は大きい。「二足農住」は生産緑地法、「策ス切断、拓ク街」は都市計画道路といった社会制度の改変にあたり失われる価値を、建築デザインを用いて保存しようとする意欲作である。「創造の楼閣」と「纏わる螺旋塔」はともに「人とモノ」の新しい関係を追求している。環境意識の高まりや、コロナ禍による生活様式の変化は、モノへのアクセス方法や所有形態、愛着の形に変化をもたらし、そこに建築が介入する。「クラシビラキ」と「菜園場にぎわい商店街」はともに衰退する町を題材として、新たな町の骨格を提案している。単なる賑わいの創出に留まらず、それぞれの状況に応じた建築の「寄り添い方」のデザインである。「新たな「縁」をつくる立体広場」はアクティビティと形態の関係を追求し、公共建築のプロトタイプ的な提案を行っている。

構造分野からは「更新と継承 SCRaMble」が多彩な構造形式を再開発に当てはめる実験的な提案を行い、逆に「伝統ケイショウ」は桔木という1つの形式を徹底して展開することで、どちらも構造にとどまらない建築デザインとしての魅力を持っている。



# ニュー・テatron計画 積乱の橋梁区

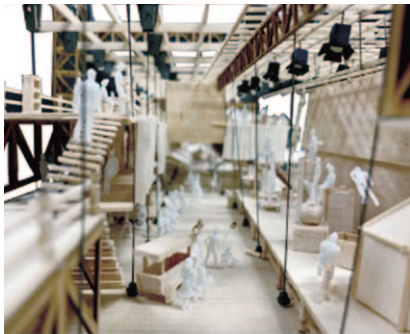
渡橋を待ちながら、あるいは都市の刑務所演劇



人類は、自己の舞台を作り上げる事で、進化し、時代を生き抜いてきた。建築もその舞台の一つである。私はこれをニュー・テatron計画と呼び、橋を建土の動かぬ可動構造物として建設する。この橋は渡橋者という観客が自ら移動することによって場面転換を繰り返し、観客を演者へと誘うことで演劇が行われる。

これは都市への刑務所演劇であり、新しい舞台提案である。これはインフラ更新期の日本においても重要な視点の一つである。

- 東京電機大学未来科学部建築学科卒業設計賞（計画・意匠）
- 学内講評会 1位 卒業設計賞
- Diploma Design 2021 Selected Works Review 最優秀賞
- JIA九州支部 Design Review 2022 8選
- 第31回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール 2022 16選
- せんだいデザインリーグ 2022 100選
- 赤れんが卒業設計展 2022 101選





# 二足農住

「農に住もう」生産緑地の再生利用型宅地化計画



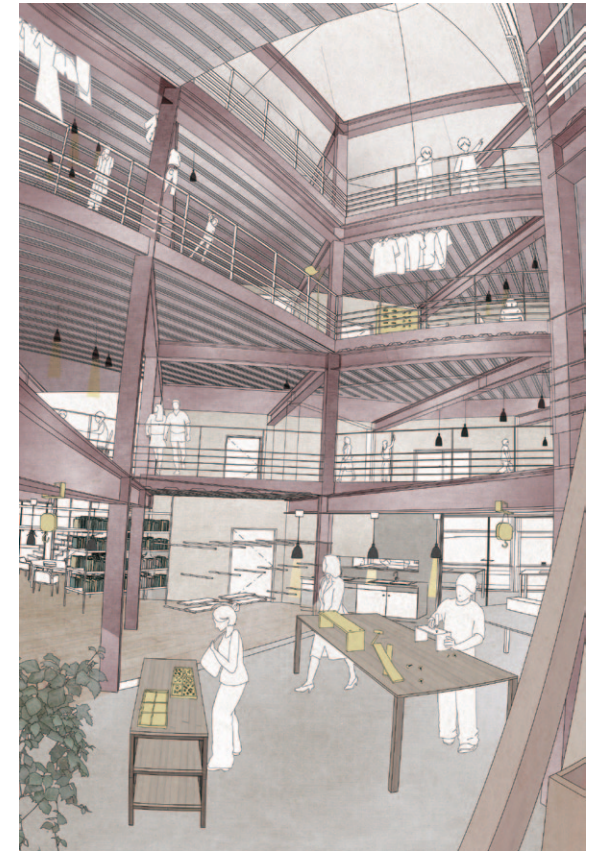
2022 年を迎え生産緑地が宅地化の一途をたどると予想され、農業従事者の高齢化や農業の後継者の減少もある中、この問題に目をつむってはならない。生産緑地を敷地とし、兼業農家を対象とした住まいと農地を共存する集合住宅を設計する。宅地化と緑地の保全、農業から生まれる住民同士の助け合いのコミュニケーションの構成、さらにはそれらの農業の生業が地域に伝わり、地域に農業があふれる。そんな農業の生活と生業があふれる複合型集合住宅を提案する。

●日本建築学会 第 63 回全国大学高専卒業設計展示会 出展





# 創造の楼閣



近年、働く時間や通勤時間の削減などにより、生活に時間のゆとりが生まれた。それとともに、ハンドメイドやDIYといった、モノを作るコトが、暮らしの中において身近になったのではないだろうか。今後より一層、ものづくりが生活を豊かにするきっかけになると考え、これまでのプロとアマチュアが分割されたあり方ではなく、誰もが創造を形にできる時代に、クリエイターや地元の人が垣根を越えて活動を展開する場として設計する。

●せんだいデザインリーグ 2022 100 選

●赤れんが卒業設計展 2022 100 選

●第45回 学生設計優秀作品展 ー建築・都市・環境ー (レモン展) 出展



設計スペース



加工スペース



洋裁スペース



販売スペース



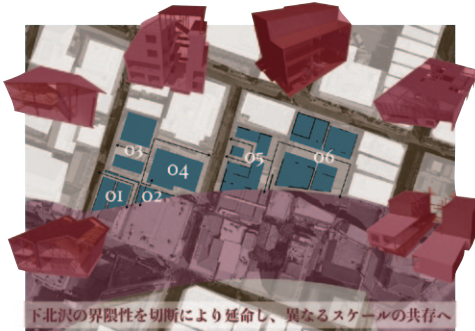
# 策ス切断、拓ク街

下北沢における都市計画道路を契機に現れた空間活用について



都市計画道路は時に、街の構造を壊し、周辺環境を大きく変える力を持っている。現在、そんな強大な力によって下北沢は以前の街の魅力を失いつつあり、どこでも見られる均質化された都市の風景に近づいている。

そこで、建て替えが行われる建物を都市計画線で「切断」という手法を選択した。すると切断には、新たな可能性が垣間見えた。この都市計画道路を中心とした再開発に抗うためには、下北沢の裏道文化を表に可視化して、価値をさらけ出していく必要があると考えた。ここにおいて「切断」はその裏っぽさを表に可視化するための操作であり、表と裏が緩やかにつながっていく。都市計画を契機に現れた切断という行為に着目し、街や建物に対して様々な切断を行なっていく。

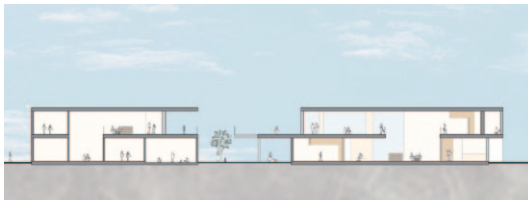
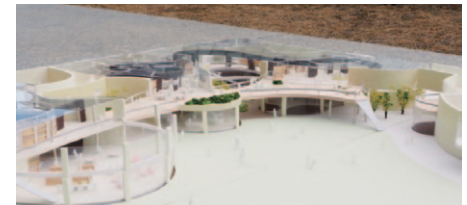
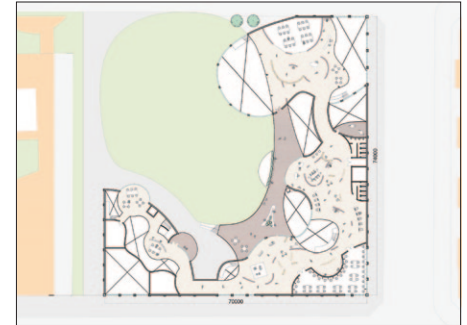


●第34回千葉県建築学生賞 特別賞





# 新たな「縁」をつくる立体広場 思い思いに過ごせるサードプレイスを目指して





# クラシビラキ

持続可能な「田舎」をつくる、余剰空間の減築によるおすそわけ街道の再編

人口減少・高齢化等がネガティブに捉えられている「田舎」において、人々が豊かに暮らしていくための商店街再編計画の提案。

暮らしの余剰空間を部分減築し、生まれた場をまちに還元することで、空間・モノ・時間・経験・知識など、「暮らし」をまちに「おすそわけ」する中間領域をつくる。

まちの人々のおすそわけによって生まれたセミパブリックな空間は、暮らしと暮らしをつなぐ結節点となり、「田舎」に豊かな暮らしをもたらす。

●近代建築社「別冊卒業制作 2022」掲載



雁木のような連続した軒下空間



商店スペースのおすそわけ



空き家を改修して屋外の茶の間に



歩道から連続する土間空間



民家の軒下で勉強会

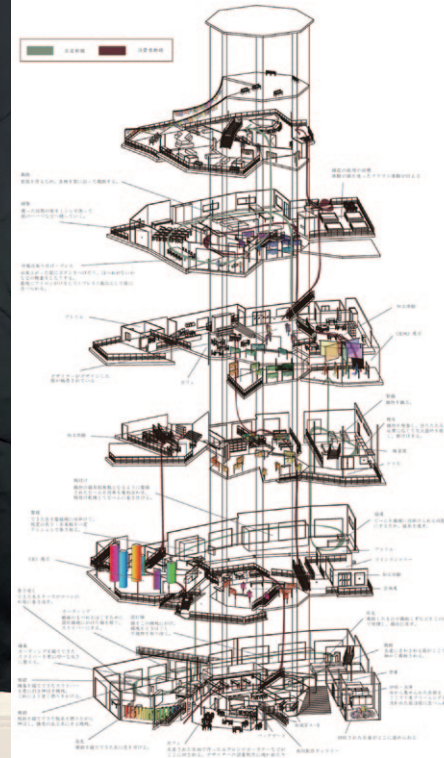


コンポストを組み込んだゴミ捨て場





# 纏わる螺旋塔



近年、ファストファッションの影響から行き場のなくなった服は多くなり、処分量も増加している。

そんな中、世界ではサステナブルファッションの考えが広がり始め、消費者と企業の関わり方がファッション界のトレンドとなっている。

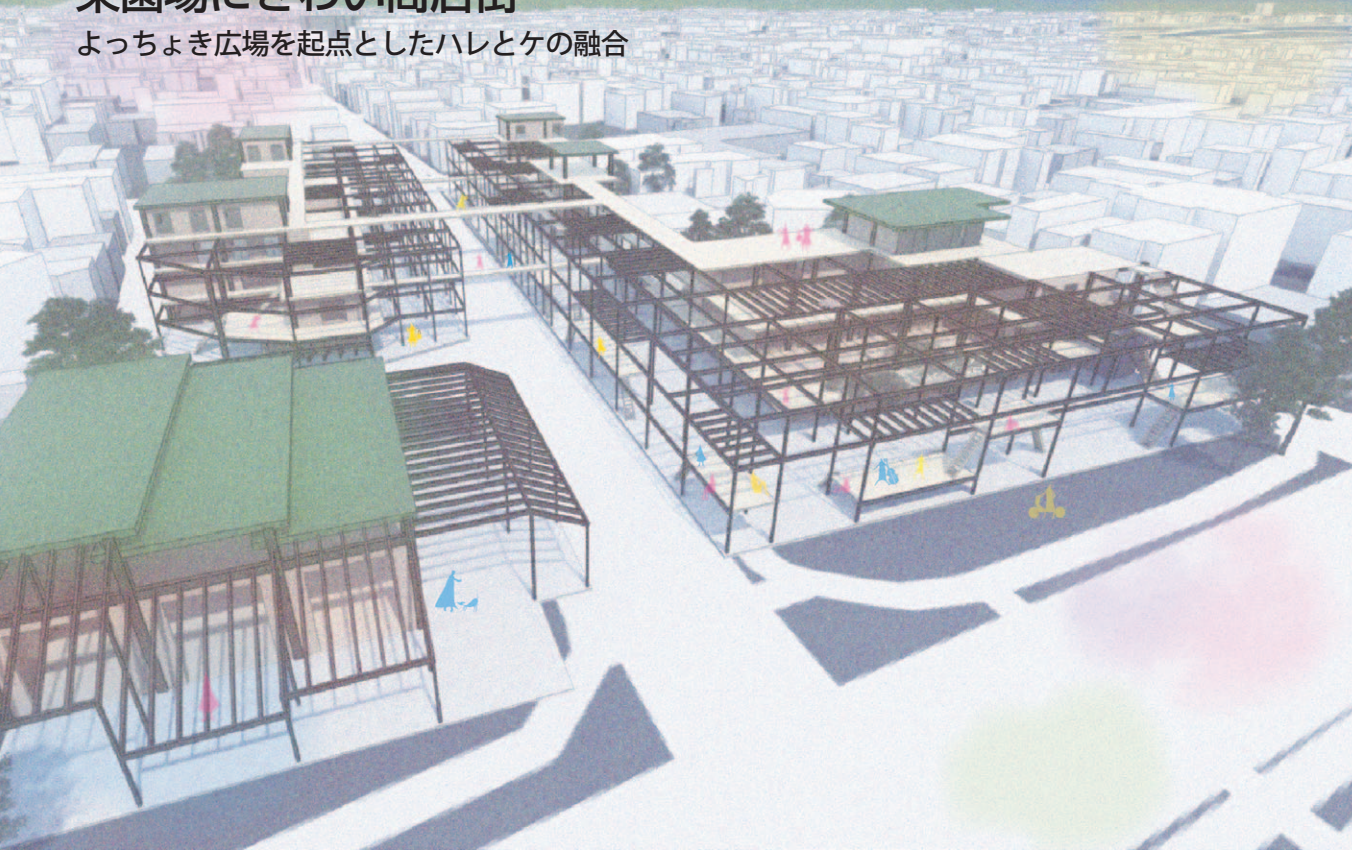
本提案では古着を回収した人へ還す過程で、日常で交わることのない消費者・生産者・デザイナーを中心に展示や加工体験などの機能で結び付けることで新たな衣類のカタチを発信する建築を計画する。





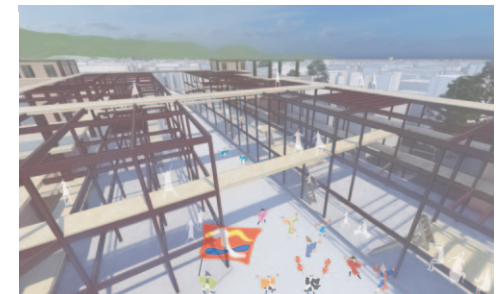
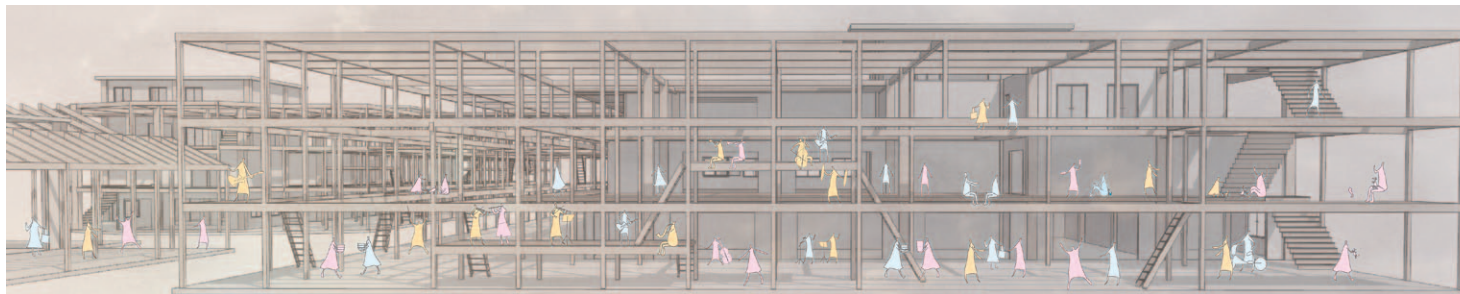
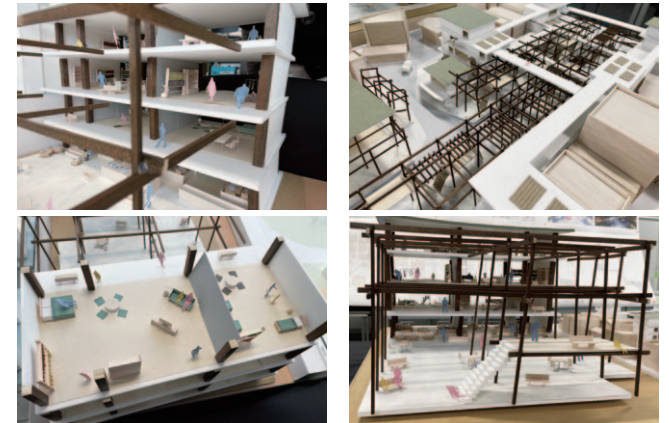
# 菜園場にぎわい商店街

よっちょき広場を起点としたハレとケの融合



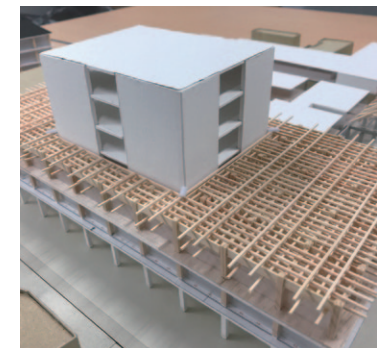
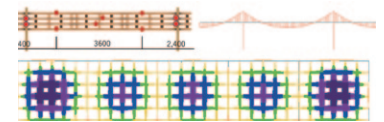
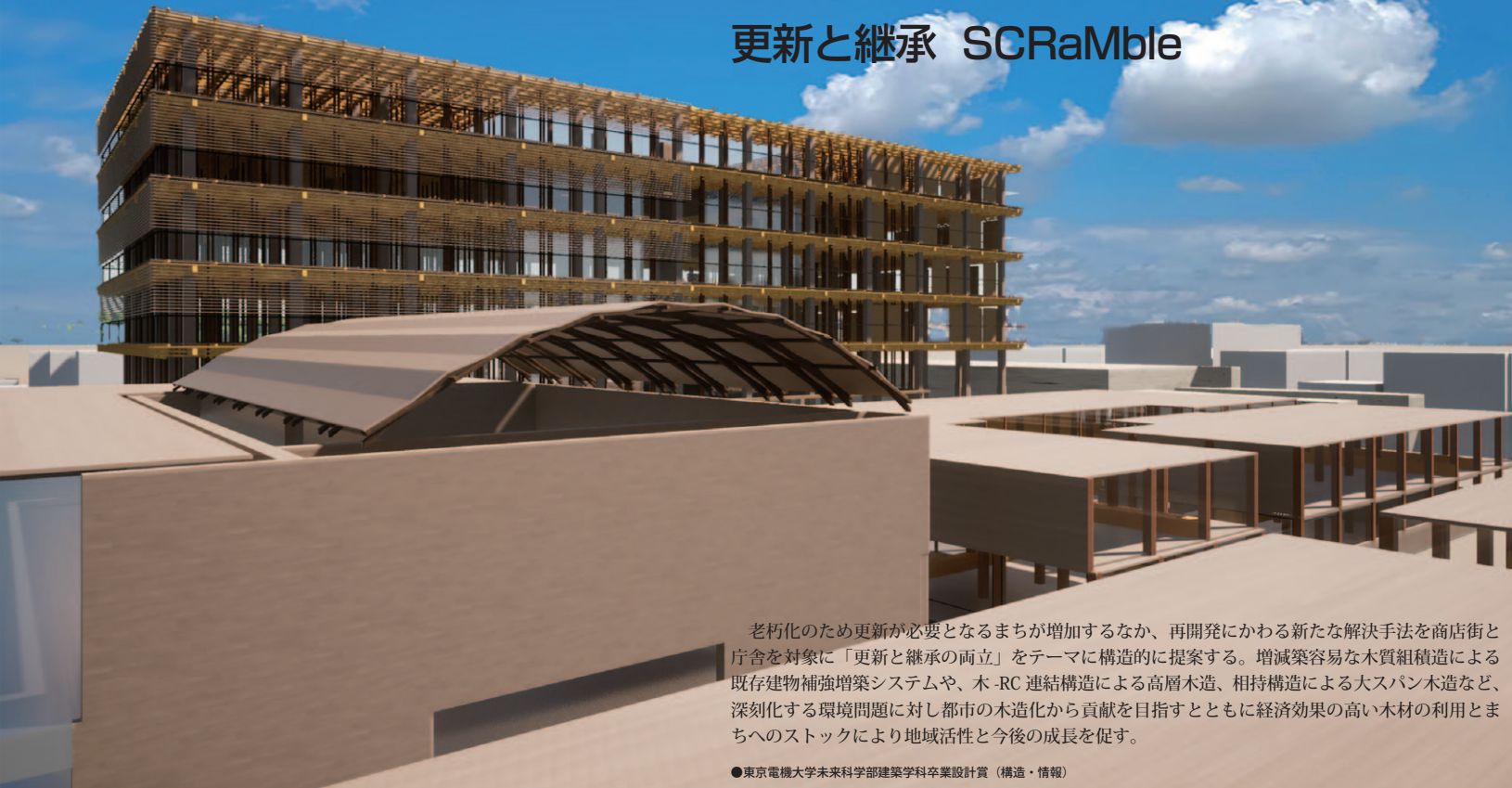
近年、少子高齢化や地域コミュニティの希薄化により、中心市街地は空洞化している。本設計では、高知県の地方商店「菜園場商店街」を舞台に、余剰空間を新規事業者に貸し出す、日常的に自分を表現する場を点在させ開く、という2つの手法により復興する。商店経営、よさこい、文化の継承が交わることで、菜園場ならではの賑わいと活力を生み出すことを期待する。

●第27回建築デザインコンペ 高知県建築士事務所協会  
高知県知事賞 および 建築デザインコンペ審査委員長賞





## 更新と継承 SCRaMble



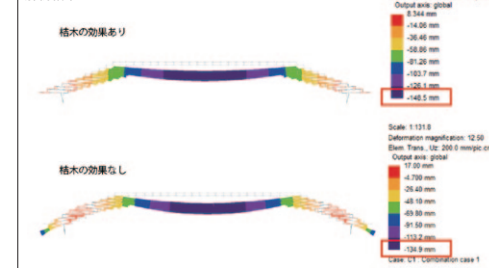
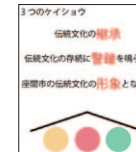
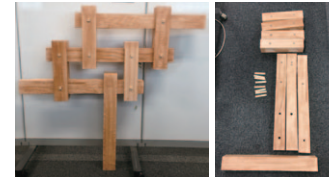
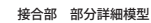
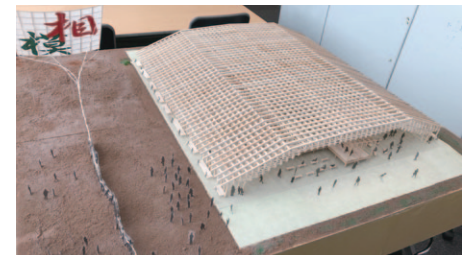
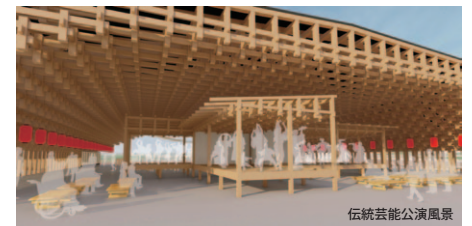
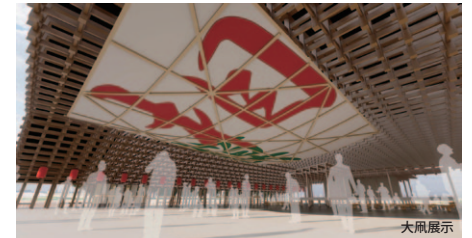
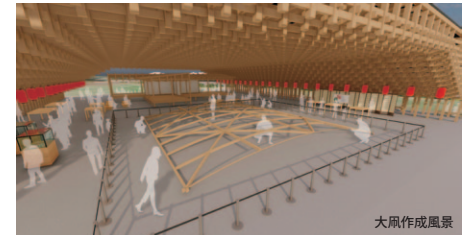


# 伝統ケイショウ



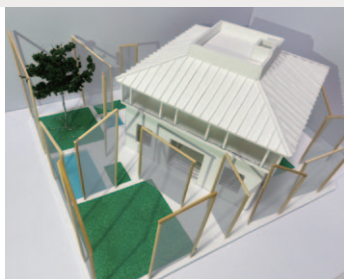
神奈川県座間市には歴史的街並み、多くの伝統文化が今も残り続けるが、近年では少子高齢化の進行等によって継承者の減少が問題となっている。

本設計では三つの「ケイショウ」をコンセプトに掲げ、日常的に伝統文化を体験でき人々が交流出来る場を提案する。全体架構は伝統構法に用いられる「枯木」から着想を得て構成し、柱スパン約 30m を可能とした。伝統構法を用いることで建築という行為そのものが継承者増加の一助となることを願う。





# 感覚を揺さぶる小空間



垣間見る庭



聴覚を研ぎ澄ます家



見て、時間をかけて感じる庭



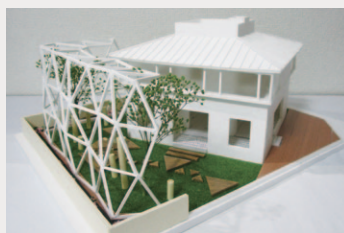
季節を感じる自由な空間



空を眺める場所



自然の中の家



構造と自然の非日常



光とかくれんぼ

## ■設計趣旨

模型制作した住宅（阿部邸）の外構（庭）を、「感覚を揺さぶる小空間」というテーマに基づき、各人の自由な創意・工夫を込めてデザインする。敷地・庭のデザインにおいて、建物の配置、および建物周囲にできる空地に対してこまかい配慮が必要になる。敷地・庭は、自分だけが使う内向きでプライベートなものから、近隣の住民を呼びこむようなオープンなものでありえる。敷地・庭を表現する素材は自由。テーマを自分なりに解釈し、魅力的な空間として展開すること。

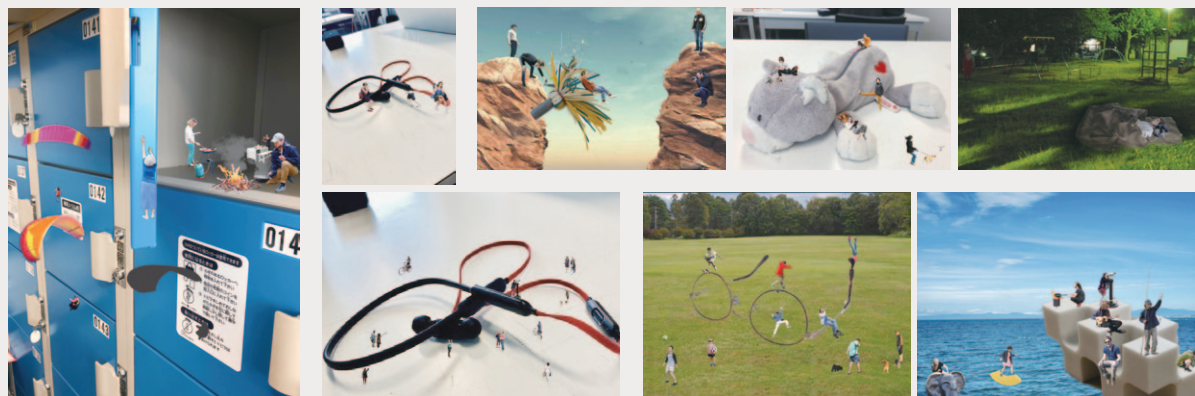
## 講評 ● 横手義洋

模型製作課題として与えられた戸建住宅の外構を、「感覚を揺さぶる小空間」として整備する設計課題である。住宅まわりに生じる大小の空間の連なりを、隣地・接道、方位・日照等の条件を加味してアレンジするとともに、「感覚を揺さぶる」をどのように解釈し、独自の空間として構築できるかが問われた。優秀作として選出されたものは、五感を通じて自然を感じ取る術をさまざまな形で実現した作品が多かった。それぞれの作品には、幾何学パターンを平面や立面で追求したり、視線や空間の仕切り方を細やかに検討したり、照明効果により光と影を巧みに演出したりと、今後の成長を予感させるような発想が展開されていた。アイデアを形にする構想力と表現力をさらに鍛え飛躍していただきたい。



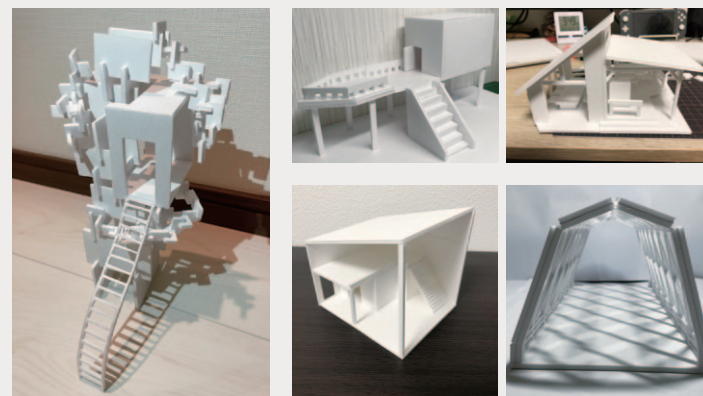
## モノのスケールを変えて、場を作ってみよう

森 班



## 自由にテーマを定め建築的造形を提案せよ

大崎 班



## Poster Design

俞 班



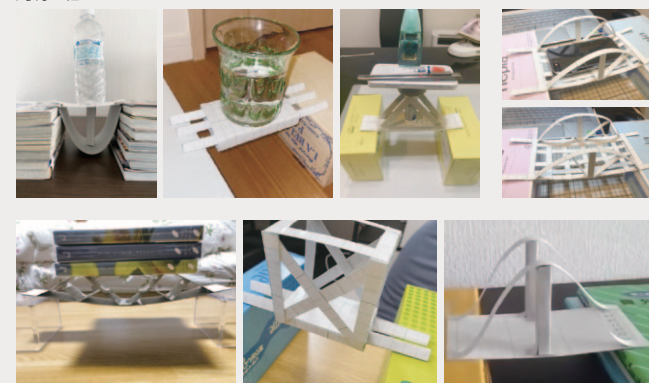
## Let's make a reciprocal structure!

小山 班



## 橋(梁)を架ける

河原 班



## 講評 ● 百田真史

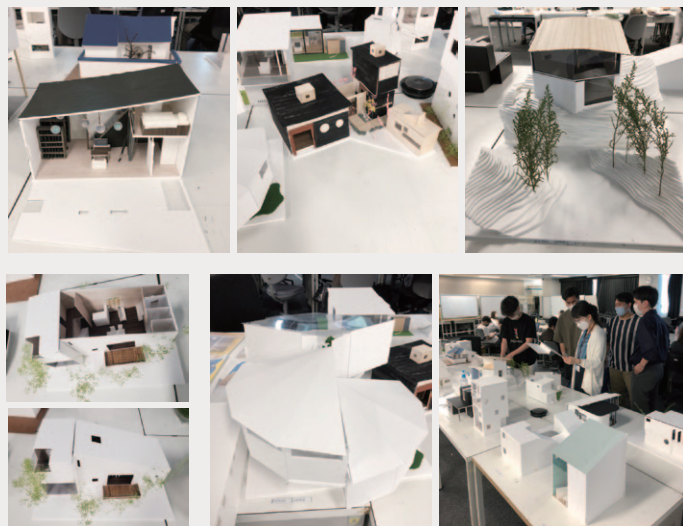
ワークショップ・建築ワークショップは、入学直後の1年最初の手を動かす授業であり、グループワークを通して仲間を作って欲しいという意図も含んだプログラムである。

2021年度もコロナ禍の影響を受け、オンライン/対面のハイブリッド講義を余儀なくされたが、授業の前半では、各担当教員の専門分野の初学として自宅でも実施できる複数課題に取り組み、生活と密着する建築学を体感した。具体的には、各教員によって内容は異なるが、素材を活かした構造体の各部材の構成と仕組みと創作、建築物の計画に関する演習、自宅を対象とした創意工夫の模索、環境を考慮した自室の改造計画立案など、何れも今後の設計製図や専門科目の習得に資する内容であった。また後半では、各担当教員別にグループ別れし、グループワークを中心とした計画・意匠/構造/環境・設備の各分野のエッセンスを体現する作品制作を通して、建築物の計画・設計・施工に資する考え方などを体験した。このような実際の体験を通して建築はひとりでは出来ないこと、そして完成の喜びを分かち合うことが十分にできたと思われ、それは作品や学生の表情から感じることができる。



## 一人暮らしの家を計画してみよう！

俞・藤井 班



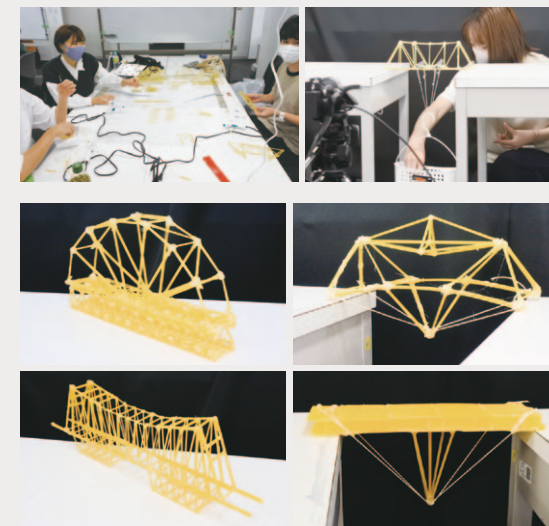
## "対話"を生み出す建築的仕掛けの創作

大崎・森 班



## Let's make a Pasta Structure!

小山・河原 班



## 夏を涼しく過ごす秘密基地を作ろう

百田・西川 班



## 自宅や街の中の課題発見・改善提案 + 木工制作

村川 班

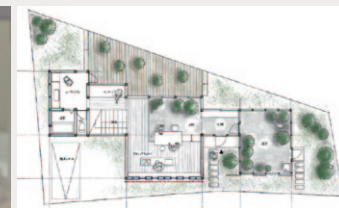
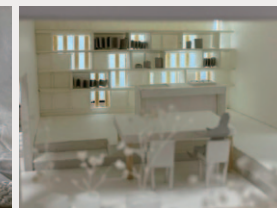
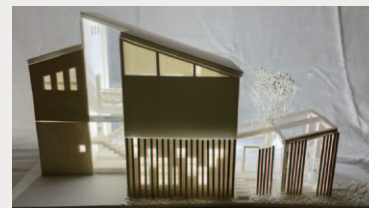
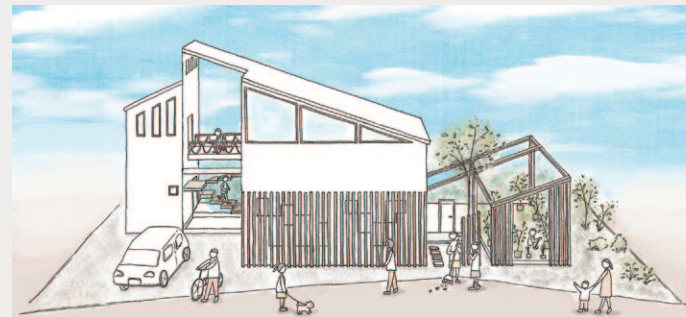
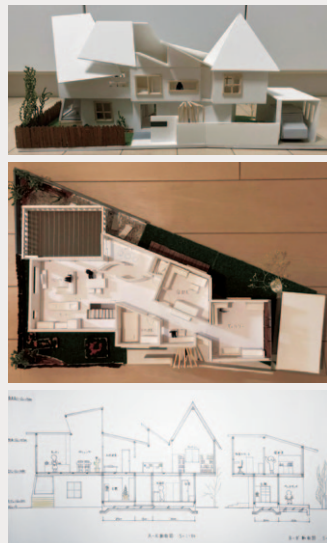




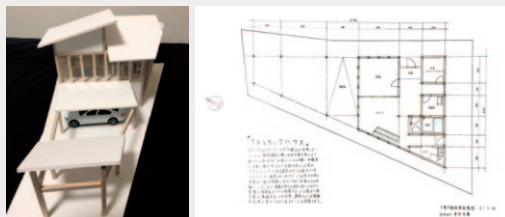
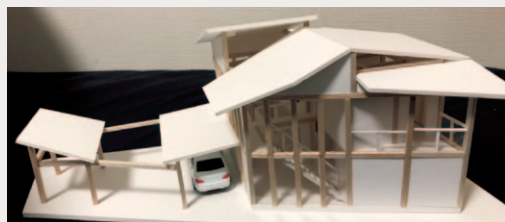
# 住まいの設計



極光に集う



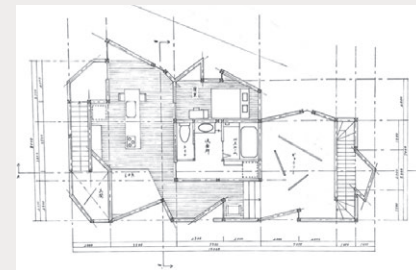
土間がつなぐ「温室」と「住まい」



アスレチックハウス



余白を用いて光を取り入れる家

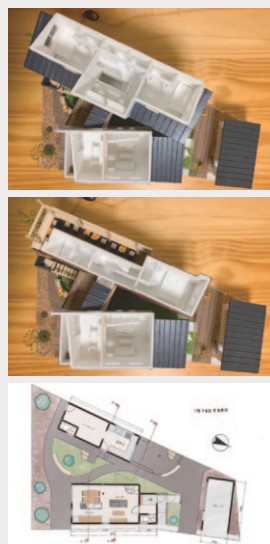


Cubisme

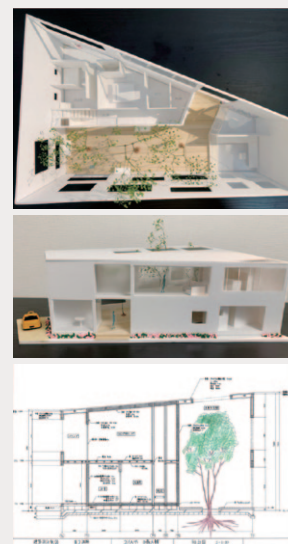




発想の転換～路地のような抜け道と住まいの関係性～



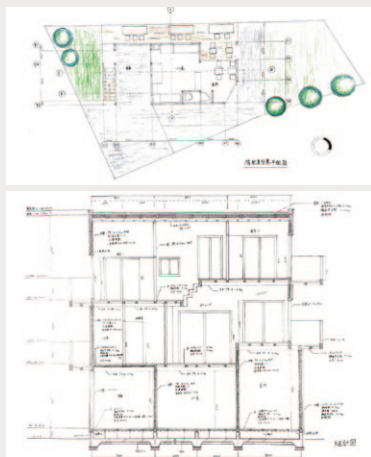
みんなの共有空間



●課題主旨  
 日野スタジオ 趣味の家  
 森 スタジオ 街もよろこぶ家  
 荻原スタジオ 絵本作家の家  
 川口スタジオ 庭に住む家  
 齋藤スタジオ 問題の家  
 能作スタジオ 公園のそばに建つ公園のよ  
 うな住宅  
 針谷スタジオ 余白のある家  
 山田スタジオ 木でつくる〇〇のような家  
 ●設計条件  
 敷地住所：東京都足立区ノ/出町  
 家族が暮らすための木造住宅を設計する。  
 周辺環境や方角などを考慮し建築の配置や  
 構成を考える。延床面積は150m<sup>2</sup>以内。

## 講評 ● 荻原雅史

建築設計製図Ⅱでは2つの課題を行います。第1課題ではキャンパス地を敷地に木造タイニーハウスを設計し、1/20の軸組模型を製作することを通して木造軸組の構造形式を学びました。第2課題では、北千住の住宅地の中の公園に隣接する敷地に、「趣味の家」「絵本作家の家」「街もよろこぶ家」「問題の家」などの8名の担当教員の設定したテーマをもとに、木造一戸建ての住宅を設計します。木造の仕組みを深く理解するために矩計図(1/30)を描くことを通して構造や素材などの具体性を図面に記述することを経験し、模型(1/50)を作成することで立体的な空間構成の能力を培います。土間空間を活かした案、大胆に外部階段を設けた案、光の採り方に工夫を凝らした案。まちとの共有スペースを設けた案など多岐に渡るアイデアが出されました。



façade baguette



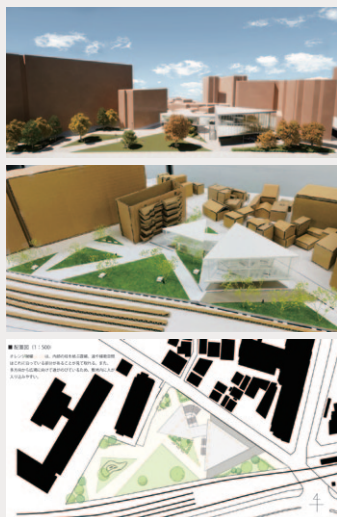
階段の庭



たなびく家



# 公共に開かれた建築の設計 一周辺地域を魅力的に活性化する施設デザインー



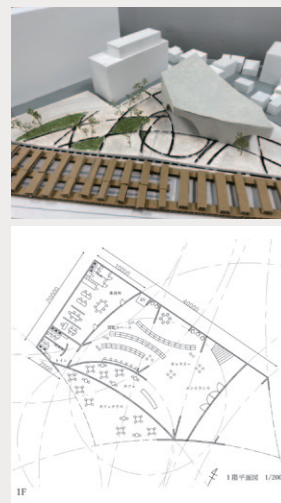
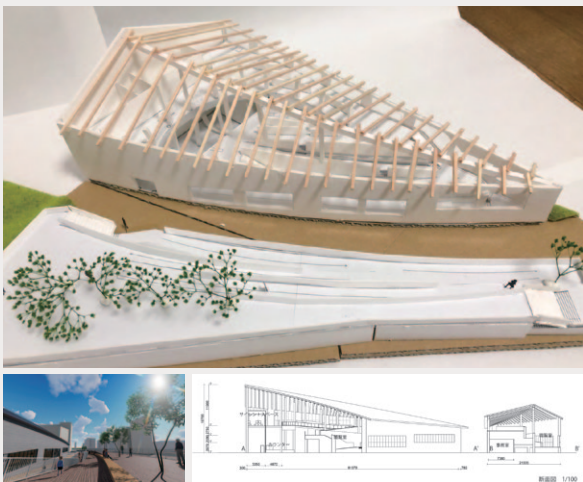
三角形でつくる



Bascul Bridge ー公園と町をつなぐ跳回橋としての図書館ー



## 歩き回る図書館 noboru ↗



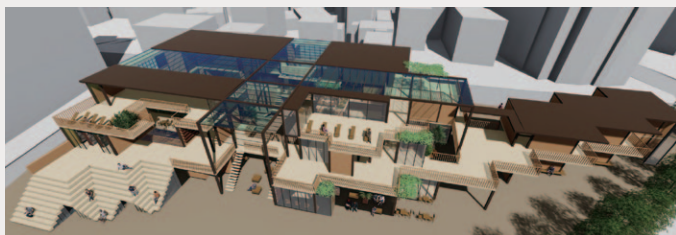
かさねる



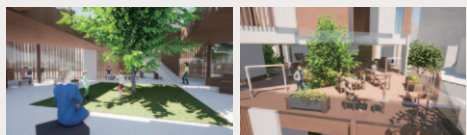




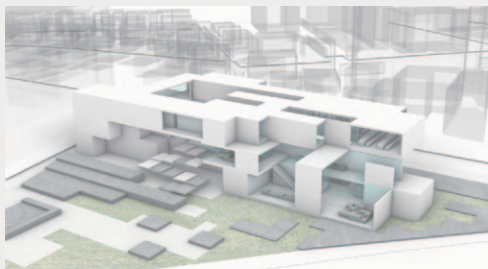
表と裏の図書館



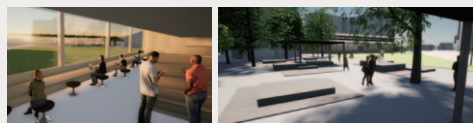
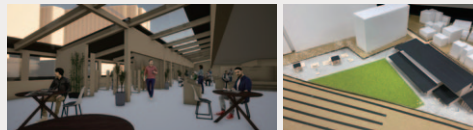
押し引きでつくる自在空間



居場所を見つける図書館



足し算と引き算が生む空間



知識の市場

#### ●課題趣旨

千住東町公園に隣接する老朽化した千住あずま保育園・千住あずま職員寮を建て替え、図書館を新設する。従来の図書館の機能・使い方に留まらず「ひとが集まり新しいことが生まれる図書館」を計画する。都市環境の中で周辺環境との関係を捉えながら、人々にとって必要とされる機能を検討しつつ、図書館に併設されたランドスケープ・パブリックスペースを提案する。リモート環境でのスタディとプレゼンテーションを前提とする。

#### 講評 ● 小笠原正豊

2年生前期の設計製図Ⅲでは、東京電機大学近隣の千住東町公園に隣接する敷地を対象に図書館の計画が進められた。

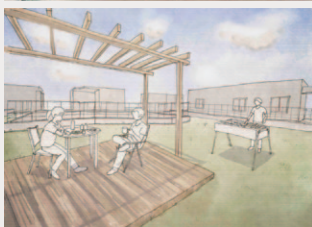
この課題では、履修者は初めて積層した公共建築に取り組む。手書き中心の取組みからCADやCGなどで作品を完成することが要求される。設計におけるより実践的なスキルと、ポートフォリオを作成するプレゼンテーション力を身につけることも目的となっている。

課題は、変形敷地であることや、ランドスケープ・パブリックスペースにも重点が置かれていることから、周囲の特徴を汲み取り多様なアイデアが提案された。「押し引きでつくる自在空間」「表と裏の図書館」「足し算と引き算が生む空間」のように形体操作のルールを設定し空間構成する案。「かさねる」「三角形でつくる」のように彫刻的な形体の案。「知識の市場」「Bascule Bridge」のように建物と近隣地域とのつながりを意識した案。「居場所を見つける図書館」「歩き回る図書館 noboru ㇿ」のように建物内部での活動に着目した案などが印象的であった。



# 集合住宅の設計・改修

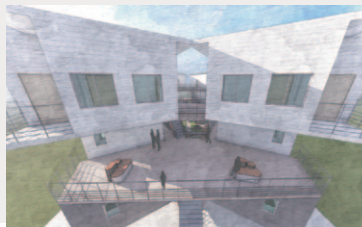
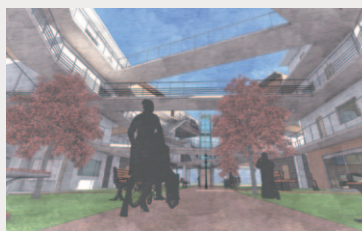
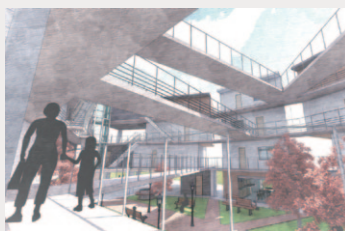
## 集合住宅の設計



Canvas Complex



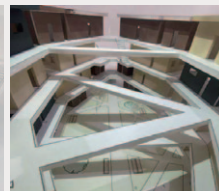
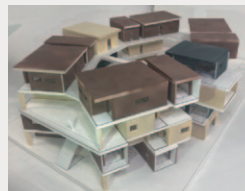
にじんで広がる



光彩 - 美しい新たな日常 -



B1-102 断面図巻ページ 1/200

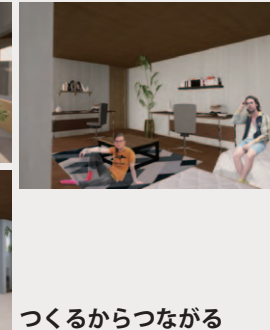




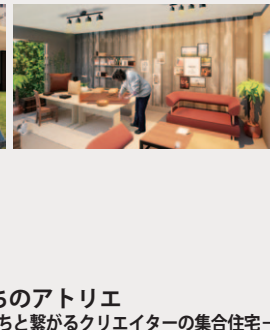
## 集合住宅の改修



Invitation for RESIDENCE



つくるからつながる



まちのアトリエ  
—まちと繋がるクリエイターの集合住宅—

### ●課題主旨

東京郊外の大規模団地の一角の敷地に 30 戸程度の集合住宅を設計する。都市環境の中で、人々が【ともに住まう】ためにどのような空間がふさわしいか、また必要とされる機能や性能は何か。周辺環境との関係や今後の社会の変化を捉えながら、「住居」と「住居の集合」をデザインし、快適で魅力ある住空間を提案する。

### ●設計条件

所在地：埼玉県三郷市・みさと団地の一角

敷地面積：約 1,600m<sup>2</sup> (+ 10%程度まで)

地域用途等：第 1 種住居地域高度地区指定なし

建ぺい率：60%とする 容積率：最大 200% 日影規制：なし

### 講評 ● 山田あすか

この課題では、3 人組で、敷地分割の計画をし、前半課題ではそれぞれの課題敷地に集合住宅を設計する。また、グループワーク課題として、コモンスペースのランドスケープデザインを提案する。さらに後半課題では、団地内にある、まちのメインストリートに面した住棟を、自由な発想で改修する課題に取り組む。

それぞれ、住民同士の交流や地域とのつながり、自然、住商の混在などそれぞれのテーマを設定している。また、平行して展開している座学科目での学びと連動して、意匠面でのオリジナリティやコミュニティ形成、構造的な挑戦、省エネルギー等への興味・関心が盛り込まれるようになる時期でもあり、履修者それぞれの興味や個性が尊重され、またグループワークによる個性の磨き合いや調和が、新たな価値観を創り出すことを期待している。

「Canvas Complex」は、立体空間としての集合住宅のヴォリュームを人間的なスケールできめ細やかに想像し、具体的な活動の場としての意味をデザインした点が評価された。「にじんで広がる」では、住戸へのリズムカルな動線計画や屋外空間を取り込みながら各住戸の環境が考えられていること、「光彩」では力強い造形と人々の行き交いが風景として設計に取り込まれていることが特徴的である。

改修課題では、住棟に「裏と表」が生じがちなことを解消しつつまちと団地の境界領域となるよう設計を行った班「Invitation for RESIDENCE」、ものづくりをキー・コンセプトとして機能でコミュニティを醸成する提案「つくるからつながる」、クリエイターの職住一体環境としての最低限の改修を施す案「まちのアトリエ」など、多彩な提案がなされた。

## 未来の小学校の設計



個性をはぐくむ



## ●設計主旨

自分が卒業した小学校を調べ、その良い点と問題点を洗い出し、自分が学びたい「未来の学校」を提案する。

## ●設計条件

- ・各自、現在の出身又は居住地の小学校児童数に合わせて計画する。
- ・1クラスの児童数は最高35人
- ・生活・総合的な学習、特別活動の授業は各学校で異なるので、出身又は居住地の学校で聞き、必要な教科別特別教室数を求める。必要に応じて学習場所を用意する。

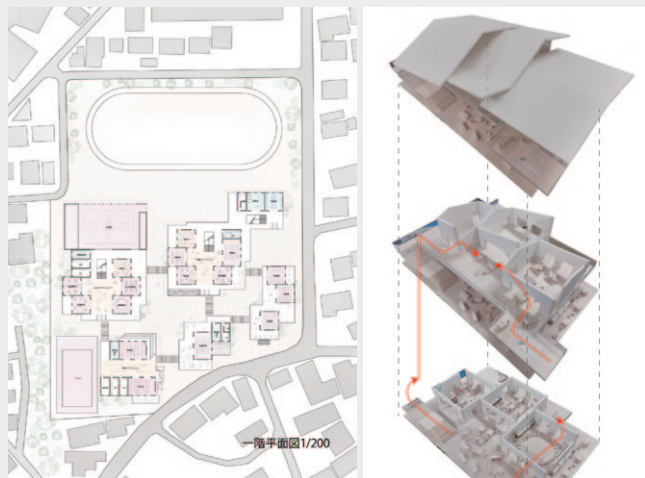
## 講評 ● 日野雅司

3年生前期前半は各学生が自身の出身小学校を建て替えて、未来の学校を設計するという課題に取り組む。各自が慣れ親しんだ出身小学校に訪れ、敷地や周辺環境をリサーチすることで、これまで生活者の目線で見えて来た環境を、設計者の目線で問い直す、というプロセスが非常に重要な課題である。

「共有する」は一見丁寧なプランニングの上に、大胆な折屋根の連続をのせる提案を行う。半屋外ののびやかな空間がデザインされている。「個性をはぐくむ」は小さい敷地を立体的に生かし、偶発性の魅力を持った都市型小学校を提案する。「桜を起点に広がる空間」は桜の木々と一体になった樹状のプランニングを提案する。敷地のポテンシャルを十分に生かしている。「街の中心となる小学校」は体育館を中心としたワンボックス型の提案である。つくり込みの完成度が高く、ダイナミックな内部空間が魅力である。

この後、前期後半は各自が設計した作品をもとに、構造と意匠分野が一体となったデザイン演習を行っている。構造デザインと意匠計画の関係について、課題を通して実感することを目的としている。

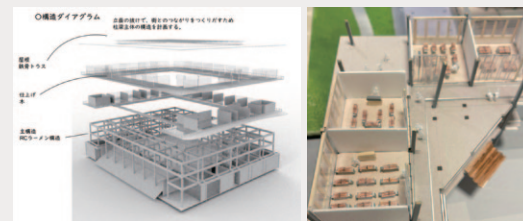
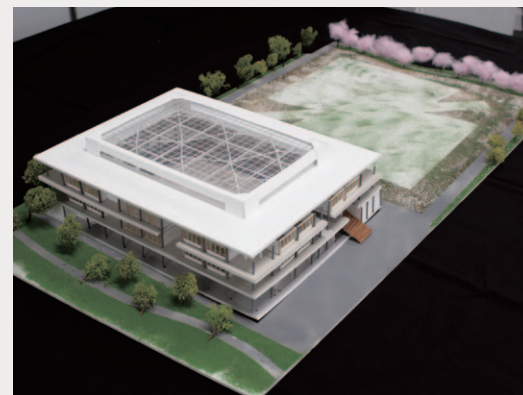




共有する



桜を起点に広がる空間

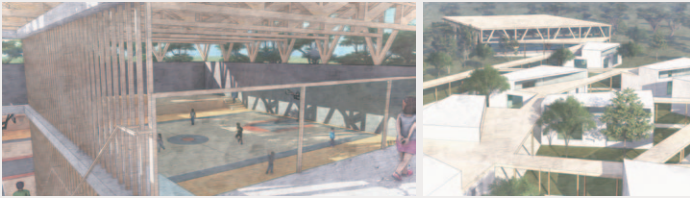
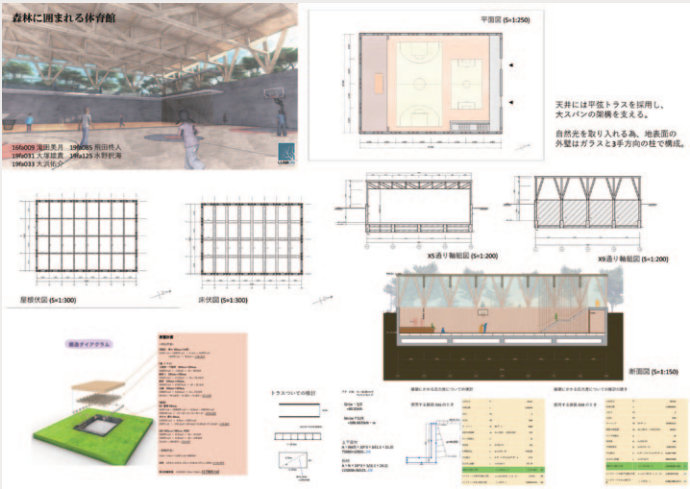


街の中心となる小学校  
— 3つの able 未来への学び舎 —

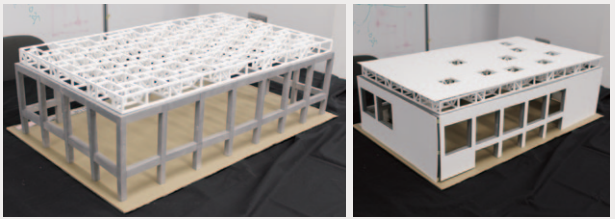
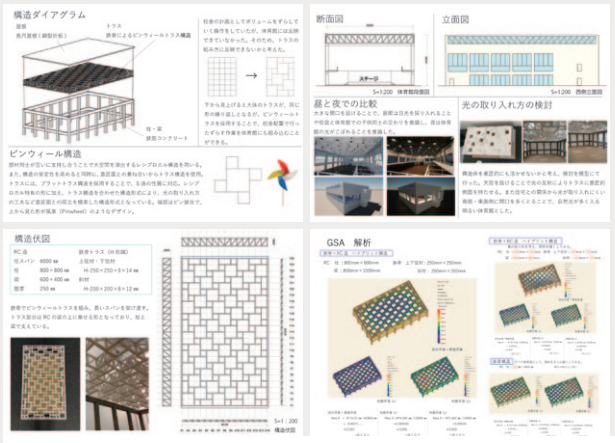




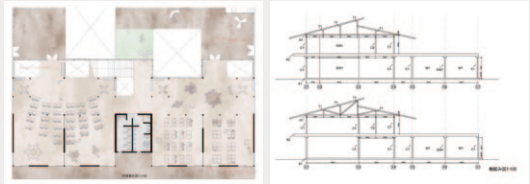




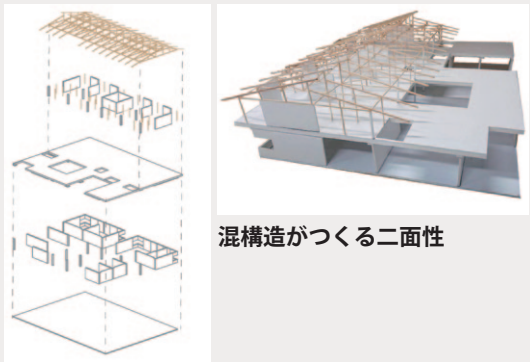
森林に囲まれる体育館



ピンウィール構造 - 構造で造る光の空間 -



混構造がつくる二面性





# 建築からまちづくりへの展開 —企画・計画・設計の関係理解— プロジェクトデザイン

## ●設計趣旨

建築設計製図Ⅱの小規模な住宅、Ⅲの積層する建築、Ⅳの集合住宅、Ⅴの小学校へと徐々に大規模かつ複雑な建築への流れをもって流れてきました。3年後期の建築・都市設計および住環境・インテリア設計をある意味でアセスメント科目として位置づけました。計画・意匠分野ならびに歴史・都市分野の学生は、この設計を通して、これまでの建築内部およびその外構が中心であったオブジェクトとしての建築から、都市という社会的存在を強く意識し、建築を客観視し、特に建築と都市の関係を相対化して建築が地域等に関わる可能性をデザインとして表現することを求めています。

特に一定の広がりのある市街地から空間提案を行う部分を取り出し、クリアランス型から修復型など多様な提案を期待しています。

## ●設計条件

計画検討範囲は、北千住駅を中心におおむね半径500mを基本として、その中に設定された約10,000m<sup>2</sup>程度のターゲットサイトを選択し、周辺地区ひいては北千住地区全体に訴求するインパクトを有する企画提案と建築デザインを検討する。

## 講評 ● 土田寛

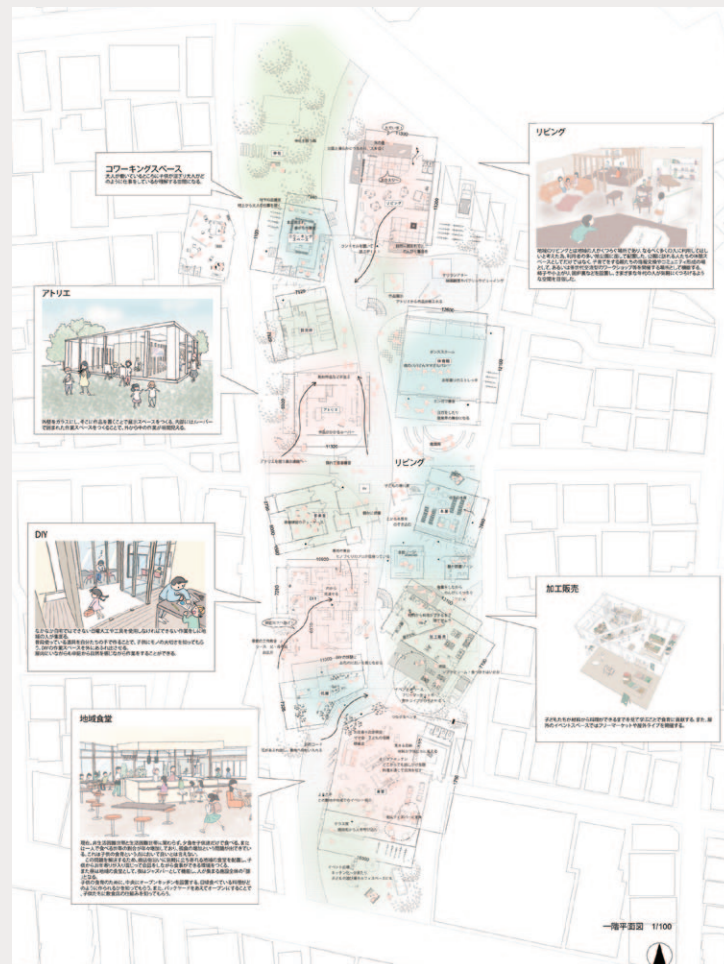
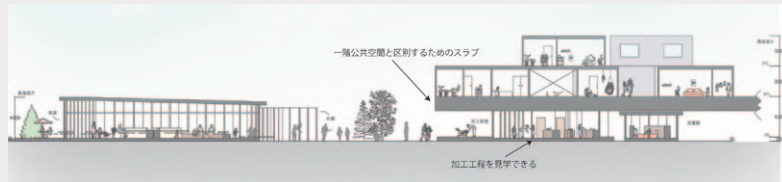
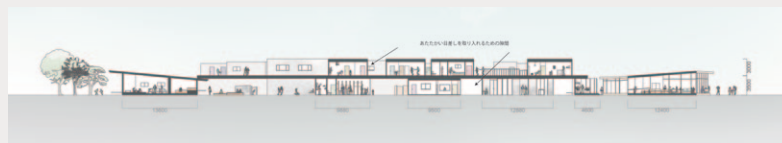
大学の立地する北千住駅周辺を対象として実地のフィールドサーベイから地域課題等を抽出し、建築、ランドスケープ、その他などを駆使し、建築的デザインの解法を念頭においた取り組みを期待した。具体的な敷地（正確にはその周辺を含む）を設定し、エスキスに際しての議論、プロセスはこれまでの演習の成果やノウハウを逆転させる意味で発想の転換など大きな転機であり、2021年度については、自粛という行動の制限が伴い、フィールドでの観察や発見が著しく損なわれたため、学生らも苦労したと思われます。

アフター新型コロナウイルスのことまでは言及できませんでしたが、都市や地域の抱える課題などに注目したことは特別設計（卒業設計）に向けて大きな前進になると考えます。



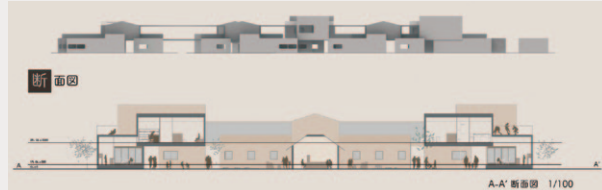
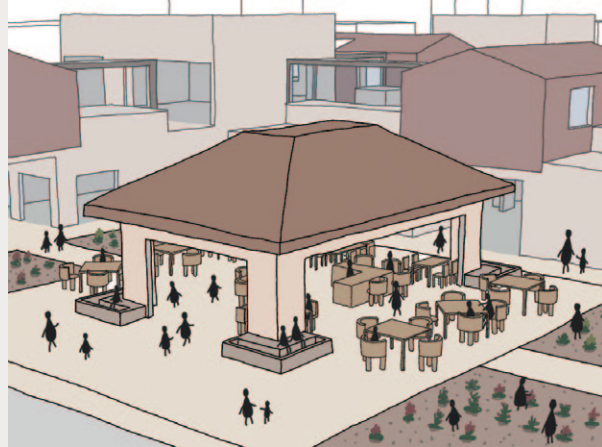
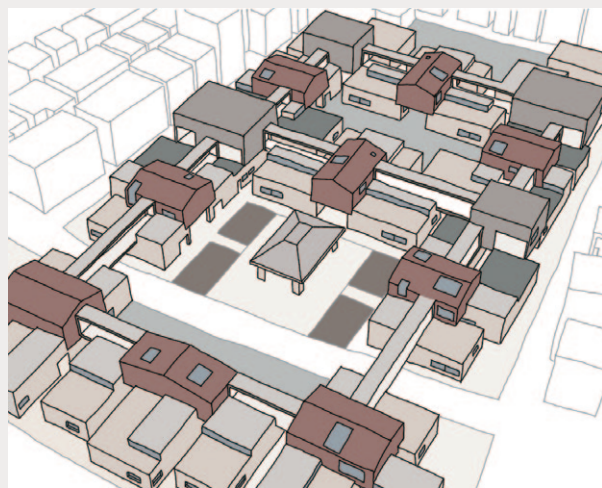
商店街に向かって大きく開口を開けることで、商店街から食堂、敷地内の集まりまで視線が通るようにする。敷地内の活動と活気を商店街まで届け、新たな人を呼び込む。

立面図 1/100

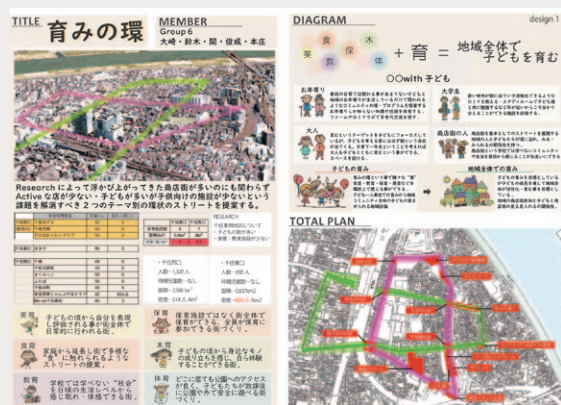


はぐくむ





子育て環境の充実とともに広がる地域の輪  
—住みやすいまちへ—



育みの環



# 建築からまちづくりへの展開 —企画・計画・設計の関係理解— プロジェクトデザイン



1. 配置図 | 1階平面図

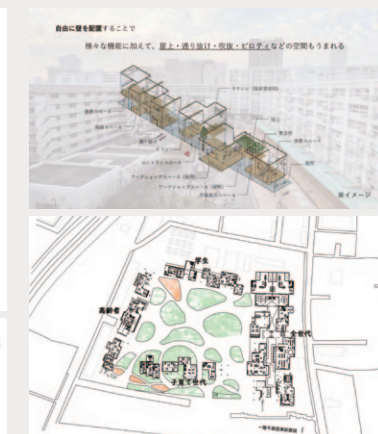
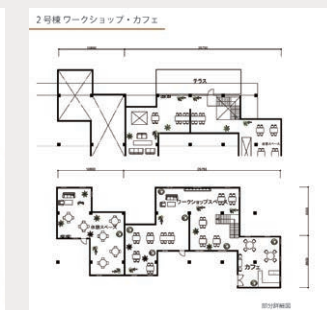
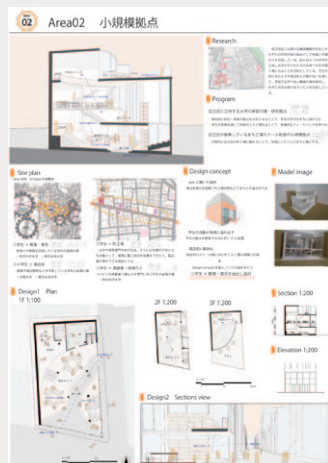


2. 2階平面図



めぐり、たまる。  
—みどりあふれる地域のたまり場—





回る街  
一町研究学園都市ー



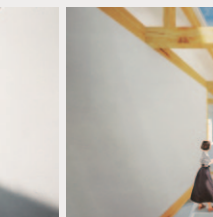
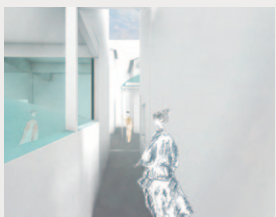
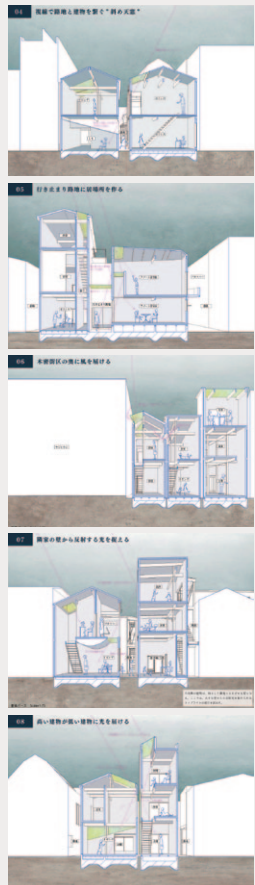
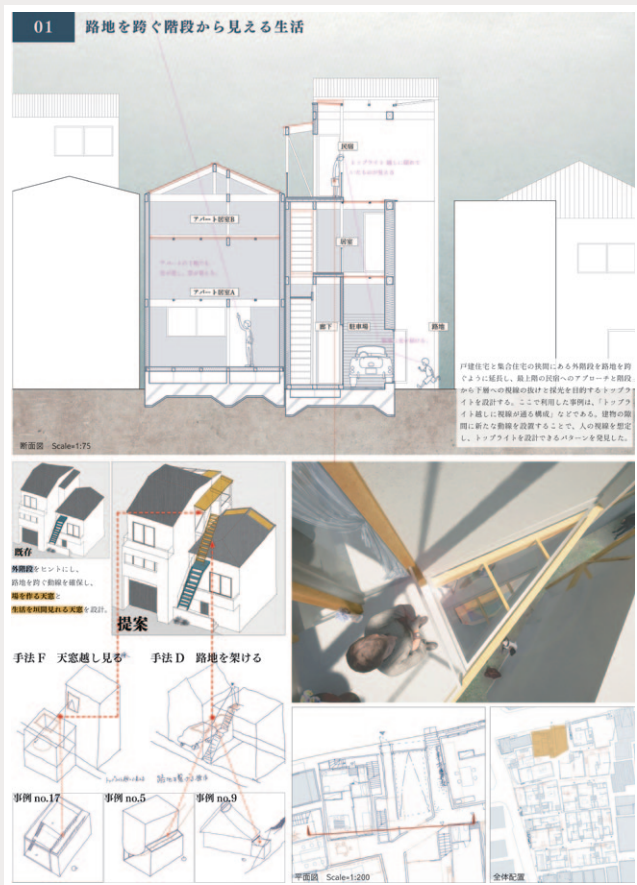
日常の共有



## 連鎖するトップライト

ートップライトを利用した木造密集街区での更新手法の提案ー

東池袋5丁目14番に残る木造密集街区を対象に、東京都に多在する木造密集地の「随時的な更新手法の発見」を目的としたケーススタディを、トップライトを利用して改修をベースに行った。木密特有の現代の枠にはまらない、近隣同士の独特な距離間が生み出す暮らしを保全しながら、場当たりにトップライトを設け、1つ1つ治療していくようなこの提案は、密集都市に徐々にヴォイドを挿入し都市的効果をもたらす。近代的な開発方法を見直し、本提案手法が次世代の更新となることを展望する。





# 日本における土を建材として用いた住宅プロトタイプ提案

世界の住居の1/3は土建築と言われる。日本は木が豊かな国であったため、土が建材として重要性を持たない世界でも珍しい国とされている。環境負荷削減の暮らしに転換するため、エネルギーを減らす構法として、「土」が建築と社会に果たす役割は大きいと考え、環境にやさしい「土」を現代にふさわしい建築材料として見つめ直し、穏やかで乾燥したヨーロッパと違い、湿度の高い日本で「土」を用いた住宅のプロトタイプの提案を行う。

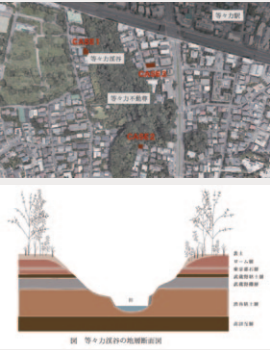


図 等々力溪畔の断面図



	case1	case2	case3
手法	A(1)+F(1)	A(1)+D(2)	F(1)+木造
ダイアグラム			
特徴	素朴・高貴・調性	再生可能・調性・耐久性	環境汚染削減・調性・素朴

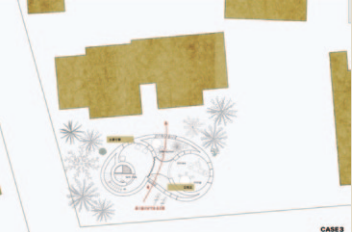
## CASE 1



## CASE 2



## CASE 3



## 講評 ● 日野雅司

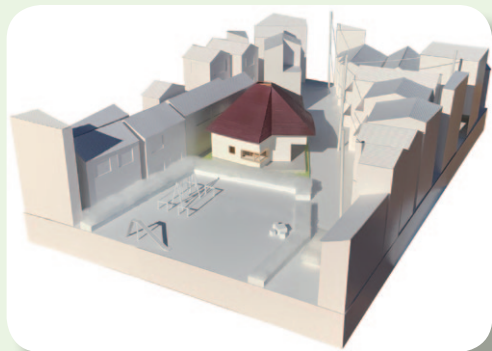
本学の大学院には、意匠と構造の設計者を育てるための「スタジオコース」が設けられており、最終学年の1年間を通して修士設計を作成する。まず各自が設定したテーマや敷地に対して徹底した調査・分析を行い、それに基づきデザイン提案を展開する。つまり結果としてのデザインだけでなく、そこに辿り着くプロセスに着目したテーマの選定と追求が重要となる。

「連鎖するトップライト」は、トップライトという本来個別の建築的要素を集団としてデザインすることで、木造密集地の新たな更新方法につなげていくという、展開力のある提案である。「日本における土を建材として用いた住宅プロトタイプの提案」は、現代の日本ではほとんど利用されていない土という素材に着目し、その性能やデザインの可能性を追求した提案である。両案ともに1つの要素に着目して設計実験を行うことで、建築デザインが扱う新たなフィールドを切り開くことを目的としている点が高く評価できる。



## ■第48回五三会建築設計競技 12選

## リビングルームのない家



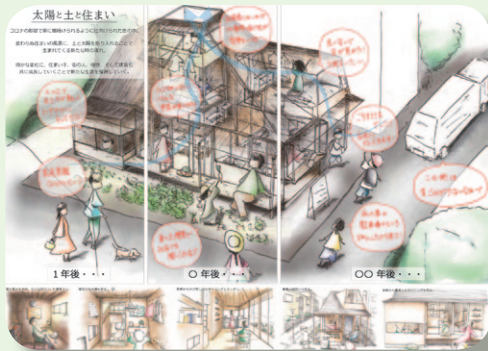
## ■建築新人戦 優秀賞

## 子どもが町へ「通う」学校



## ■三栄建築住宅設計 佳作

## 太陽と土と住まい

■三菱地所設計設立 20 周年特別企画  
+ ミライプロジェクト 関東エリア優秀賞

## 時代の転轍機

～赤字ローカル線の目抜き通りを用いた線的コモンへの転化～

■高知県建築士事務所協会 第27回建築デザインコンペ  
高知県知事賞 および  
建築デザインコンペ審査委員長賞

## 潮江市ーみんなで作るあげる小学校ー

■株式会社 ArchiTech 主催 オンライン卒制展  
2021 BEAVER 特別賞  
[Rhinoceros/Grasshopper 部門]  
■埼玉建築設計監理協会主催 建築系学生奨励  
事業第21回卒業設計コンクール 奨励賞

## FolPod



今年は昨年の3組の受賞に続き、6組の学外コンペ受賞があり、多くの学外での評価を得た。

「五三会建築設計競技」は全国から熱意を持った学生が出席する設計競技であり、数多くの提案から選出された。「建築新人戦」は全国の大学での設計課題作品を対象に実施する一大イベントであり、その中で優秀賞は特筆に値する。この2名は3年生時点での受賞となり、その取り組みと熱意に称賛を送りたい。

「時代の転轍機」は「+ミライプロジェクト」で受賞した。こちらも多数の応募の中から表彰されたものであり、鉄道の廃線を活かす優れた提案が印象的である。

「潮江市」は自らの出身地に向けた取り組みであり、電機大での学びを地元に戻元するという意味でも、特筆に値する取り組みと言えるだろう。

「FolPod」は複数の部門で受賞した。特に「Rhinoceros/Grasshopper 部門」での受賞は本人の高い技術力を示すものであると考える。

(DA編集部・森創太)



## 2021年度 設計教員

### ■常勤教員

秋田剛	akita takeshi	教授
朝山秀一	asayama shuichi	教授
土田寛	tsuchida hiroshi	教授
積田洋	tsumita hiroshi	教授
百田真史	momota masashi	教授
山田あすか	yamada asuka	教授
横手義洋	yokote yoshihiro	教授
遠藤薫	endo kaoru	特別専任教授
朝川剛	asakawa takesh	准教授
大崎淳史	osaki atsushi	准教授
小笠原正豊	ogasawara masatoyo	准教授
小山毅	koyama tsuyoshi	准教授
笹谷真通	sasatani masamichi	准教授
西川雅弥	nishikawa masaya	准教授
能作文徳	nousaku fuminori	准教授
日野雅司	hino masashi	准教授
荻原雅史	ogihara masashi	講師
松永英伸	matsunaga eishin	講師
河原大	kawahara hiro	助教
藤井里咲	fujii risa	助教
兪ハニ	Yu Ha-Nui	助教
森創太	mori souta	助手

### ■掲載課題担当非常勤教員

会田友朗	aida tomoro	枡澤麻利	tochizawa mari
綾井新	ayai arata	虎尾亮太	torao ryota
井上康	inoue yasushi	長尾美菜未	nagao minami
川口有子	kawaguchi yuko	中山薫	nakayama kaoru
川村大樹	kawamura daiki	奈良昇	nara noboru
黒田隆士	kuroda takashi	能作淳平	nousaku junpei
工藤浩平	kudo kohei	濱田慎太	hamada shinta
河野有悟	kono yugo	原浩人	hara hiroto
熊谷玄	kumagai gen	針谷賢	harigai masaru
斎藤由和	saitou yuwa	村井一	murai hitoshi
佐藤裕	sato yutaka	藤田雄介	fujita yusuke
下久保亘	shimokubo wataru	森田祥子	morita sachiko
杉山聡	sugiyama satoshi	山雄和真	yamao kazuma
鈴木裕治	suzuki yuji	山田明子	yamada meiko
角倉剛	sumikura tsuyoshi	吉里裕也	yoshizato hiroya



## DA2021-2022 dendai architecture 東京電機大学建築学科作品集

2022年7月 発行

2025年1月 PDF版発行

### ■発行者

東京電機大学未来科学部建築学科  
〒120-8551 東京都足立区千住旭町5番  
TEL:03-5284-5520

### ■編集 設計準備室

### ■ブックデザイン 井上智陽

### ■表紙作品 「積乱の橋梁区」(卒業設計)



**DA** dendai architecture  
**東京電機大学建築学科作品集**  
2021-2022